論文の要約

氏名：井口梅文

論文題名：敗血症患者の退院時日常生活への復帰を妨げる急性期臨床的因子

【目的】敗血症患者の生命転帰に関する研究はあるが、どの程度の症例が退院時に日常生活へ復帰できるかについての調査や、日常生活への復帰に影響する急性期臨床的因子についての報告はない。本研究の目的は、敗血症患者の日常生活への復帰がどの程度であるかを調査し、急性期集中治療における各種管理指標とバイオマーカーなどのうち、日常生活への復帰を妨げる因子を検討することである。

【方法】本研究は日本大学医学部附属板橋病院（以下、当院）での単施設観察研究で行った。対象は、当院救命救急センターへ入院した患者のうち、敗血症診療国際ガイドライン 2016 の敗血症診断基準を満たし、入院前の日常生活動作（activities of daily living; ADL）の程度が良好だった患者 57 例である。バイタルサイン、血液生化学データ、動脈血液ガス分析、血糖値を測定し、それらを基に、低血圧と酸素化障害の日数、血糖値の変動を算出し、血清バイオマーカーを測定した。転帰は退院時に評価し、mortality（生命転帰）、 cerebral performance category （CPC）、Glasgow outcome scale-extended（GOS-E）score、 modified Rankin Scale（mRS）を用いた。

【結果】57 例の退院時の転帰は、mortality で good（生存）91.2%、poor（死亡）8.8%、CPC で good 17.5%、poor 82.5%、GOS-E で good 14.0%、poor 86.0%、mRS では、good 15.8%、poor 84.2%であった。1 週間を通しての平均血糖値は、GOS-E と mRS の評価では転帰良好群で有意に低値を示し、mortality（生命転帰）と CPC で有意差を認めなかった。入院後各日における平均血糖値は、GOS-E 評価では入院第 1 病日と第 4 病日を除く全ての入院病日で、mRS 評価では入院第 0, 5, 6, 7 病日で、転帰良好群で有意に低値だった。血糖値の変動は、いずれの転帰評価でも、有意な変化を認めなかった。集中治療室での管理目標となり得る、低血圧の日数と酸素化障害日数は、転帰不良群で有意に長かった。多重ロジスティック回帰分析の結果、GOS-E と mRS の評価で、低血圧の日数が独立した転帰不良因子として抽出された。血中バイオマーカーは、日常生活への復帰における転帰評価で有意差を認めなかった。

【結論】敗血症患者が退院時に日常生活へ復帰できる割合は少なかった。退院時の転帰は、低血圧の日数や酸素化不良の日数に関係した。平均血糖値をより低く管理することで、転帰を改善させる可能性が示唆された。これらの結果は、敗血症患者が日常生活へ復帰することを見据えた新たな治療戦略となり得ると考えられた。